

# 難波における京の形成

古市 晃

## はじめに

難波地域の旧状は近世以降の都市開発によって大きく改変されているため、現地表面から条坊の痕跡を見出すことはきわめて困難である。京に関連する文献史料も乏しい。発掘調査も条坊遺構の面的検出にはほど遠い規模に限定される場合が多く、図上復原に頼らざるを得ないのが現状である。文献史料、条坊痕跡共に相対的にめぐまれている、平城京をはじめする他の都城と同等の精度によって難波京を検討することは、不可能といわざるを得ない。

しかし一方で、発掘調査事例の増加、遺構解釈の再検討などを通じて、難波における京の問題をめぐる研究状況は、この10年ほどの間に大きく進展している。ここでは、これらの研究成果に依拠しつつ、難波における京の形成についての見通しを概観しておきたい。

## 1. 1990年代までの研究史

難波京復原案は文献・考古・地理など、諸分野の研究者によって早くから提示されてきたが（沢村1970、藤岡1971、中尾1976など）、上町台地周辺が近世以降の度重なる開発によって地形的に改変されていること、発掘調査を充分にともなわず、地形図と現地形の観察に頼らざるを得なかったところに大きな限界があった。

こうした状況にあって、岸俊男は、1886年の五千分の一地形図（大阪実測図）に難波宮の南北中軸線上にほぼ一致する古道痕跡を見出し、その周辺に一辺約265m四方の方格地割や直線道路痕跡があることを指摘した上で、難波京を岸説藤原京（新益京。以下新益京に統一）と近似した規模と推定した（岸1977）。その後、南北中軸線を南に約10km下った松原市大和川今池遺跡では、中軸線の延長上に、溝心々間で約18.5m幅の道路遺構が検出され（大和川今池調査会1980、大阪府文化財センター 2008）、『日本書紀』白雉4年（653）6月条に「修治処々大道。」とある「大道」に相当すると考えられている。

その後、大阪実測図を分析した岩本次郎は、岸説をほぼ踏襲しつつ、四天王寺の南側に「往大道」「大道」「北河堀」「河堀」などの地名が見えることを重視し、南京極を四天王寺の南辺に求めている（岩本1992）。

積山洋は難波宮周辺で発掘された正方位の溝間の距離を測定し、四天王寺から大川南岸に至る上町台地上の広い範囲で、方六百尺ないし九百尺の正方位の方格地割が存在したことを指摘し、方格地割が7世紀後半にさかのぼること、方格地割が従来考えられたよりも北の大川南岸まで広がっていることなどを指摘している（積山1997）。

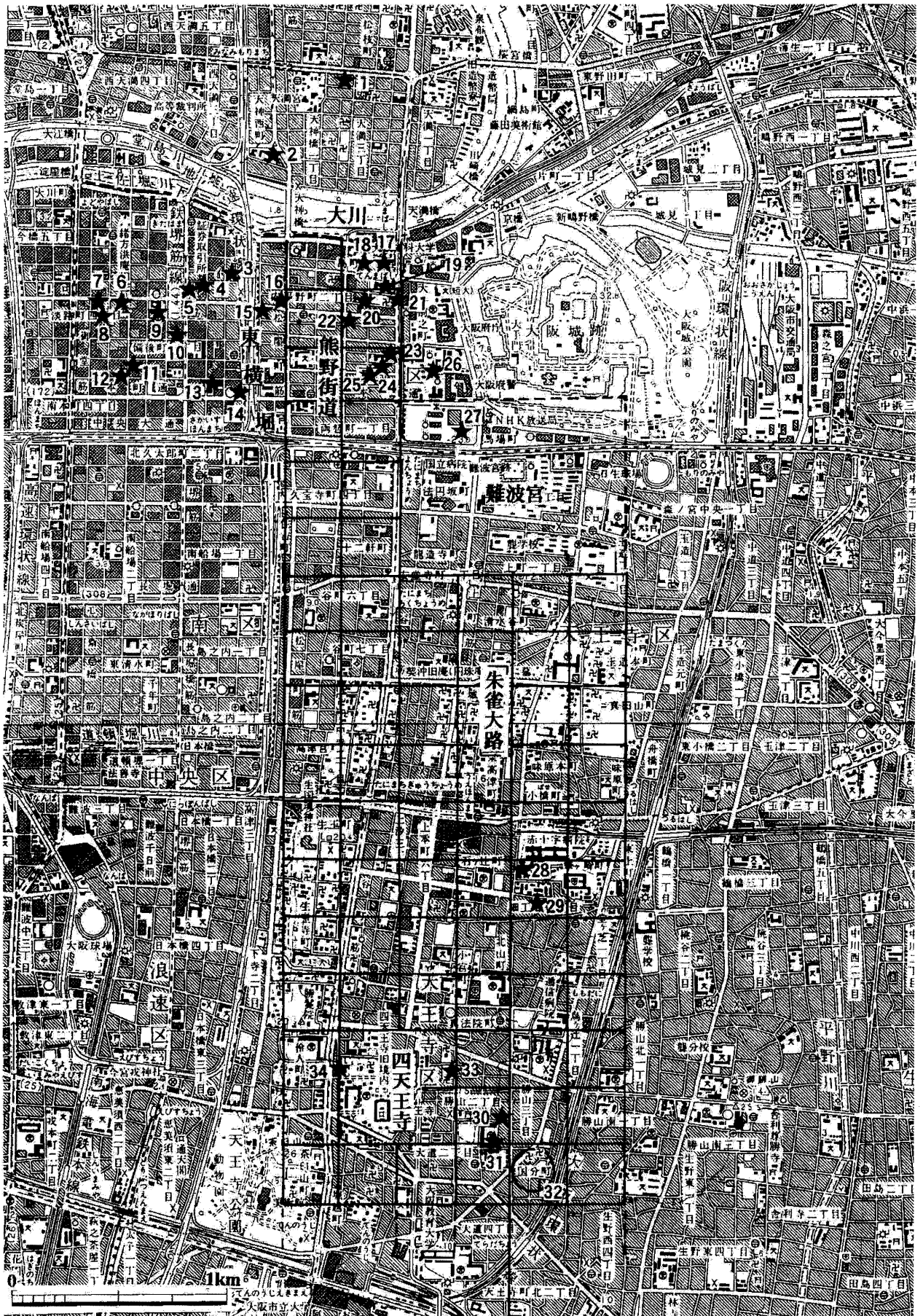


図1 難波地域方格地割復原図 (積山2002より)

## 2. 難波京の形成過程

### (1) 前史

京は基本的には正方位を志向して敷設される。日本最初の条坊制都城である新益京もまた、正方位をとったのであるが、飛鳥における最初の正方位志向の施設は、6世紀末の飛鳥寺であり、王宮が正方位をとるようになるのは7世紀前半、皇極の飛鳥板蓋宮以降とされる(林部2007)。難波における正方位を志向して造営された施設は、5世紀代の法円坂倉庫群などを除けば、7世紀代では四天王寺に求めることができる(田辺2005)。同時期の難波宮下層遺跡の建物群は地形に制約され、北で西に振れる方位をとっている。なお、『日本書紀』推古21年(613)11月条に「又自難波至京置大道。」と見える大道は、同、仁徳14年是歲条に「作大道於京中。自南門直指之、至丹比邑。」とある記事を反映させることが妥当であるならば、少なくとも7世紀初頭以来存在したもので、それは大和川今池遺跡で検出された道路遺構とも一致するものと考えられる。四天王寺の創建年代は、瓦から7世紀第2四半期とされる。すなわち、難波宮造営以前の難波地域には、おそらくは難波津から発した南北の直線道路である「大道」と四天王寺の、正方位をとる二つの施設が存在したことになる。同じ時期に難波に営まれた大規模な掘立柱建物群(難波宮下層遺跡)は、難波に置かれたミヤケの施設と考えられるが(吉田1982)、その方位は北で西に振れ、正方位を志向しない。道路と共にまず寺院が正方位を志向して造営された点は、飛鳥における飛鳥寺の事例と共通する。この段階の倭王権の統合中枢として、王宮及びそれに類する官衙よりも、寺院が重視されたことの反映ではなかろうか(古市2009)。

乙巳変後の難波遷都の経緯については、子代離宮=小郡宮から味経宮=難波長柄豊碕宮へという、2段階の過程で説明されることが多い(吉川1997)。小郡宮は南門や庁の立つ庭、紫門、殿や鐘台をそなえた本格的な王宮であり、その立地は「摂津国家地売買公驗案」(東南院文書)などから、現在の大阪城西の丸付近と考えられている(吉川1997)。しかし発掘調査ではいまだ確認されておらず、小郡宮の方位は不明とせざるを得ない。

難波に設けられた王宮で方位が判明するのは、白雉3年(652)完成の難波長柄豊碕宮である。1954年以来の発掘調査で確認された前期難波宮がそれにあたる可能性が高く、前期難波宮は正方位をとる。孝徳が目指した王宮は、皇極の飛鳥板蓋宮と同様、正方位を志向したことになる。難波長柄豊碕宮の規模はいまだ確定しない。南限と西限は宮城南門(朱雀門に相当)及び一本柱塀の検出によって確定している。しかし北辺及び東辺を画する施設は確認されていない。北辺については内裏西方官衙の北側で検出された大規模な谷を越える可能性は少ないことから、一定の推測が可能である。この谷から2点の陽物形木製品が出土していることに注目した平川南は、百濟、陵山里寺跡出土の6世紀代の陽物形木製品が、羅城東門近くの道に架けられ、王京への邪悪なものの侵入を防ぐ祭祀具としての役割を果たしたことを主張し、難波の事例についても同様であると指摘した上で、宮域の北西隅がこれによって定まったとする(平川2006)。傾聴すべき見解であろう。東辺に

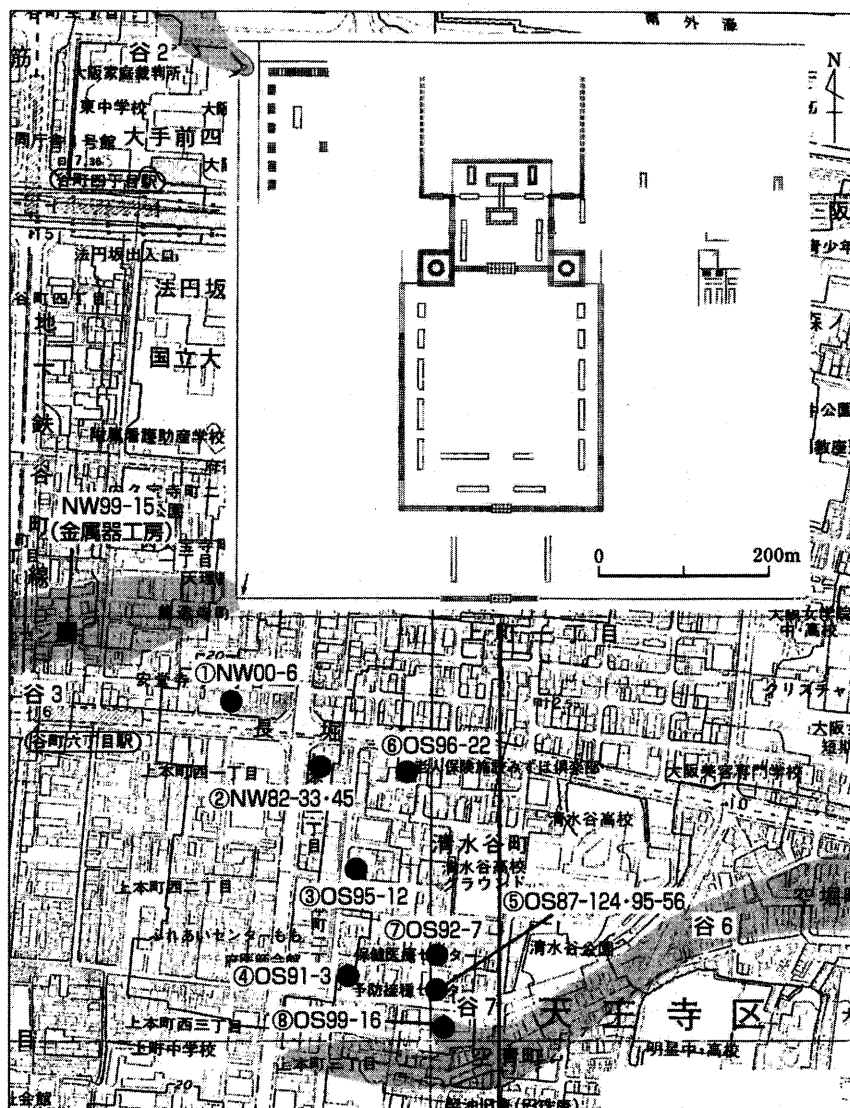


図2 難波宮南辺の様相(1) (積山2004より)

については、近年の発掘調査で、いわゆる東方官衙のさらに東から、楼阁風の建物を擁する施設が検出され、前期難波宮が南北中軸線による左右対称形をなしていた可能性は少なくなった。しかしこの施設の東側の地形は、現状で急激に下っており、東へ大きく延びる可能性もまた少ないのである。一応の推定として、東西約630メートル、南北約730メートル程度の広がりをもっていたと想定しておきたい。

近年の発掘調査によって、前期難波宮周辺の開発状況が次第に判明してきている。まず注目されるのは、前期難波宮造営にともなって、台地上の入り組んだ谷地形を埋め立てる整地が行われたことである。整地層は南北1.5km、東西1kmの範囲で検出される大規模なものである(寺井2004)。整地後に建てられた建物群は、特に宮の南側で顕著に正方位をとる。また、宮の西限を画する南北堀の延長上で一本柱列が検出されており(大阪市教育委員会他2002)、宮内と同一企画の地割が施工されたことが指摘されている(積山2004)。

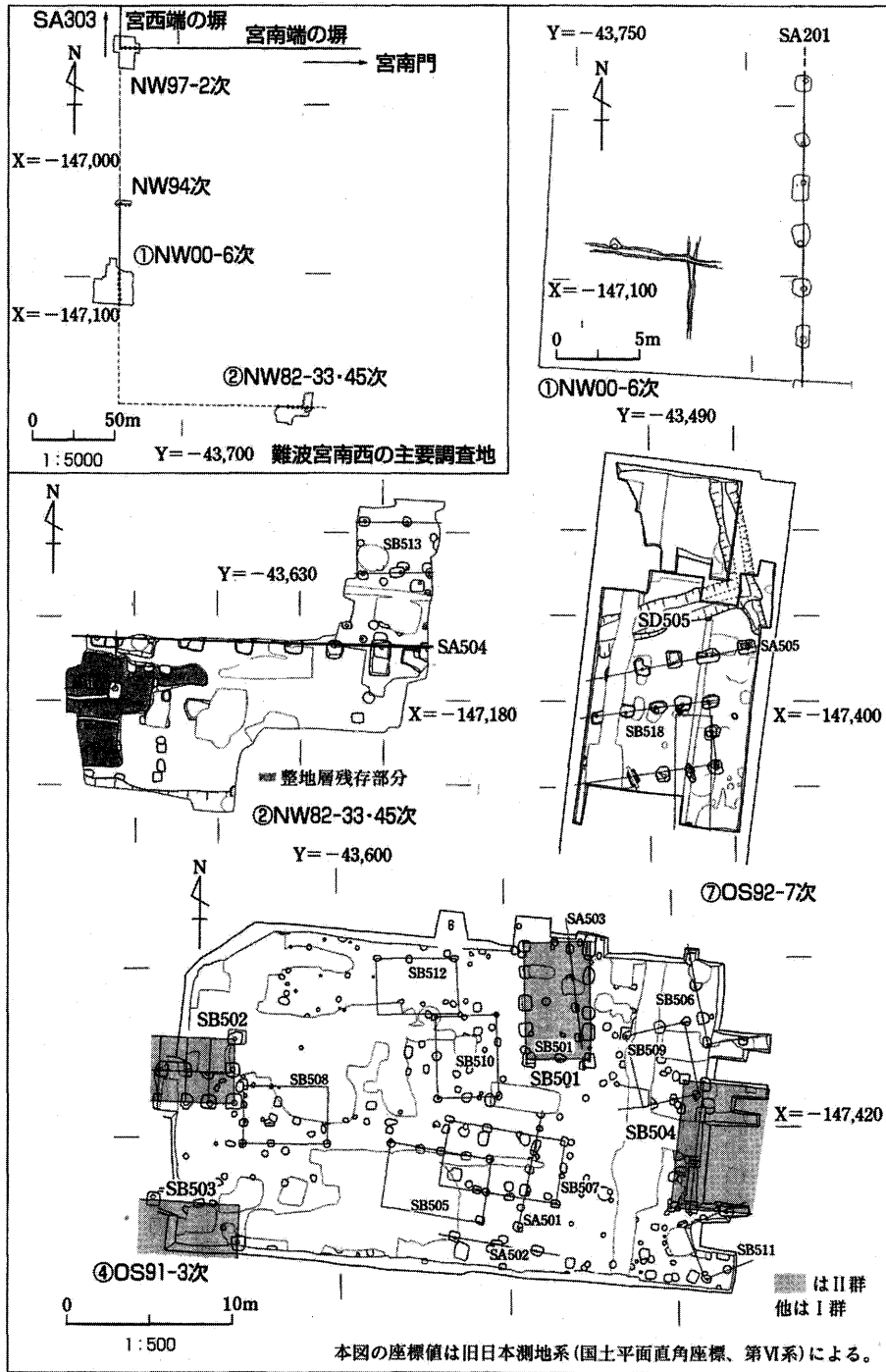


図3 難波宮南辺の様相(2) (積山2004より)

7世紀中葉以降、難波長柄豊碕宮を中心とする周辺地域の整備計画が一定の進展を見ていたことが確認できるのである。

積山洋は、孝徳朝の造都事業にともなって成立した諸施設及び集住空間の総体を、初期難波京と呼ぶ(積山2004)。この段階では条坊地割は存在しないが、宮を中心とする地割が行われ、中国色の濃厚な施設が存在したと推定する。

前期難波宮に代表される孝徳朝難波宮の造営にともない、従来例をみない巨大な都市空

間が上町台地上に出現したことは間違いない。しかしそれを京と呼ぶことには慎重であるべきではなかろうか。京は、厳密には条坊制とそれにもなう行政機構の存在を前提として成立する行政区画の名称であるし、難波の場合、倭京のような実態を反映したと見られる語が用いられているわけでもないからである。

黒崎直は、飛鳥地域に、飛鳥宮跡Ⅱ期遺構（飛鳥板蓋宮に相当）段階で約106m（1/5里）、飛鳥宮跡Ⅲ期遺構（後飛鳥岡本宮に相当）の段階で約132m（1/4里）の地割の尺度が存在したとの自説を元に、難波宮域でも難波長柄豊碕宮段階で前者、天武朝段階で後者の尺度を基準とする地割が存在したとの仮説を提起し、同様の地割が、宮の南北中軸線と東西線の基線（宮城南門）を基準として、京域でも施行されたことを述べる（黒崎直2007）。黒崎説の眼目は、区画施設が地割線より10.2m（29令大尺）後退した地点に設置されたことを想定した点にあるといえるが、後退設定の数値は氏も述べるように仮の推定値の域を出るものではなく、遺構として確認されたものではない。この種の議論が意味を持つためには、遺構に基づいた確実な数値によって検討がなされる必要があるだろう。

## （2）天武朝の造営

文献史料によるならば、難波に京が置かれた可能性があるのは天武朝からである。天武6年（677）10月には、内大錦下丹比公麻呂を「摂津職大夫」に任じる記事が見える（『日本書紀』）。後世の潤色の可能性も捨てきれないが、後には確実に難波京を管理する摂津職が登場することは重要な意味をもつ。同12年12月、複都造営を命じた詔において、百寮に難波に行って家地の支給を申請するよう述べていることも（「又詔曰、凡都城宮室、非一処、必造二両参。故先欲レ都二難波。是以、百寮者、各往之請二家地。」）、京制施行を示唆するものかも知れない。天武5年以降、『日本書紀』に「京」「京師」の語が頻出すること、同13年には新益京の造営計画が決定し、ほぼ時を同じくして藤原宮内で先行条坊が掘削されたと考えられていること（小澤1997）、複都制の理念からすれば、天武朝の段階で難波に京制が施行された可能性は高いといえよう。発掘調査によって7世紀代の条坊を確認することが今後の課題である。

これに先立つ天武8年11月、竜田山と大坂山に関を設けた際、「仍難波築二羅城。」とする記事があり（『日本書紀』）、京制との関係が注目される。関の設置が述べられていることから、羅城を軍事的な防御施設の意味に解釈することも可能である。しかし平城京南面に羅城が築かれていることを想起すれば、難波京南面にも羅城が設置されていた可能性を考えておくべきかも知れない。なお、比売許曾神社（大阪市東成区）には建武2年（1335）の年紀をもち、社地の四至として「羅城土居」と記した文書が伝来している（長山雅一1988）。長山も指摘するように、文書自体は後世の偽作と考えられるが、記載自体は近世において羅城土居と称される構築物が存在したことの反映である可能性もある。さらなる検討が必要であろう。

## （3）聖武朝以後

朱鳥元年（686）の難波宮焼亡後の難波京の具体的な状況は、まったく不明である。ただし積山が集成した正方位をとる溝の事例には、7世紀代、とりわけ7世紀末に埋没しているものもあることから、宮の焼亡にともなって京の規模も縮小した可能性がある。なお、文武3年（699）、慶雲3年（706）、養老元年（717）と、焼亡後の難波宮にはたびたび天皇が行幸を行っている（いずれも『続日本紀』）。難波では、天皇の滞在に耐え得る施設の維持・管理がはかられていたものと思われる。

一方、発掘された前期難波宮と後期難波宮の中軸線がきわめてよく一致することから、神亀3年（726）の難波宮再建の直前まで、前期難波宮の主要建物が焼けた状態で存在していた可能性が指摘されている（李陽浩2005）。

聖武天皇による難波宮の再建は、神亀3年（726）、藤原宇合の知造難波宮事任命によって開始される。天平6年（734）、難波京の宅地班給記事が見え（『続日本紀』天平6年9月辛未条「班給難波京宅地。三位以上一町以下。五位以上半町以下。六位以下四分一町之一以下。」）、この頃には造営が一段落していたことがうかがえる。新益京の事例（『日本書紀』持統5年〈691〉12月乙巳条）と比較した場合、宅地の規模が4分の1以下と小規模であることから、奈良時代の難波京の条坊もまた小規模であった可能性もあろう。

近年の発掘調査によって、奈良時代の難波京を考える上で興味深い遺構が見つかる。一つは天王寺区上本町南遺跡で、正方位をとる奈良時代後半から平安時代初頭の建物群が出土している。建物は造替されており、長期間にわたって利用されたこと、緑釉陶器が出土したことから、居住者が一定の有力者であることなどが指摘されている（高橋2006）。もう1例もやはり上本町南遺跡で、正東西方向の溝が一条見つかる（平田2004）。溝からは西日本各地の製塩土器が出土しており、『続日本紀』延暦3年（784）5月癸未条に見える「難波市」との関連も想起される。しかしこの場合、それよりも重要なのは、この溝が正方位をとることである。つまり奈良時代の条坊と何らかの関係をもつ可能性が高い。またこの溝は8世紀中頃に埋められており、その上に新たに建物が建てられている。平田洋司は天平16年（744）、難波宮が一時的に首都となったこととの関係を示唆している（平田洋司2004）。それに加えて、8世紀中頃といえば、難波に拠点をもつ百済王氏が活発に活動する段階でもあり、この頃に難波京の再整備が行われた可能性は十分に考えることができよう。同様の事例の増加を俟ちたい。

### 3. 難波京の範囲

#### (1) 京の南限

先に述べたように、積山洋は7世紀後半段階での方格地割の施行を主張する。この段階で、四天王寺周辺から大川南岸に至る広い範囲で正方位の地割が意識されたことは、断片的な調査事例を丹念に集成・分析した積山の作業ではじめて明らかになったことである。とはいえ、この傾向を過大に評価することは、現段階では慎重であるべきであろう。積山



も指摘しているように、上町台地の東裾部などでは、地形の制約によって斜め方向の道路が検出されているし、最近見つかった細工谷遺跡の大型建物も、谷地形を利用して、正方位をとっていない（松本2007）。方格地割がどの程度施行されていたかについては問題がある。また仮に方格地割が条坊地割を示すものであったとしても、それが上記の範囲に全面的に施行されていた確証はない。むしろ、これまでに確認されている正方位の遺構の所在地を前提とするならば、難波京の条坊は難波宮南北中軸線上の道路（朱雀大路）に沿った部分、また難波宮の周辺などに限られていた可能性が高い。起伏に富んだ上町台地上に全面的に条坊を施行するには技術的な制約があり（植木2000）、比較的平坦な部分、また都城としての威儀を示す上で必要な部分にのみ施行されたと考えるのである。大阪実測図において、四天王寺と大道の周辺に条坊痕跡が集中的に観察できることも、このように考えるならば合理的に説明できる。但し、この区域においても、条坊の施行が十全になされたわけではない。高橋工によって、京内の南北中軸線上には、8世紀に至っても開析谷が整地を施されないまま存在し、道路の敷設が事実上困難であった箇所が存在したことが報告されている（高橋2007）。高橋はさらに、朱雀大路が難波宮南北中軸線上に敷設されたこと自体に疑問を投げかけ、上町台地のより高所に中心となる大路が存在したことを推定する。現在の調査成果に立って南北中軸線付近の開発状況を明らかにした点は、貴重な業績である。しかし一方において、和田廃寺の発掘調査で明らかにされたように、新益京においても朱雀大路が完全に敷設されたわけではないことを考えれば、南北中軸線が都城の計画線としてのみ存在し、道路としては未着工のままであった可能性も当然、想定できるであろう。

四天王寺周辺に関しては、難波京南京極との関連を想定する岩本次郎説が参考となる。岩本は条坊痕跡と地名から、難波京南京極を四天王寺南辺に求めたのであるが、これは上町台地の地形がこの付近を境に南に大きく落ち込むという地形上の制約からも支持できる。実は四天王寺南辺のさらに一条分の方格地割が確認できるのであるが、岩本はこれをあたかも平安京の四周における外京的な土地割と同様のものとして、当初からの条坊とする案を斥けている。先に紹介したように、この部分には「北河堀」「河堀」などの地名が見え、延暦7年（788）の撰津大夫和氣清麻呂による大和川治水工事の痕跡とする説があるのであるが、岩本はこれには慎重な態度をとっている。しかし当該地の地形は周囲に比べて低く、北西に進めば同じ工事の痕跡とされる河底池に達することから、これらの地名と地形が、清麻呂による土木工事によるものと考えて問題はないものと思われる。

以上のように考えるならば、難波京の南京極については、岩本説のとおり、四天王寺南辺とすることができよう。この地点を南限とする点については、7世紀後半造立の四天王寺東門が方格地割に乗っていること、地形上の制約などの理由により、前期難波宮段階も同様と考える。羅城の存在の有無、及び存在したとするならばその位置が問題となってくるが、現段階ではこれ以上の憶測は慎むべきであろう。



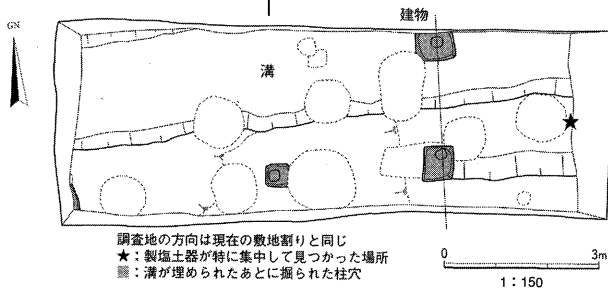
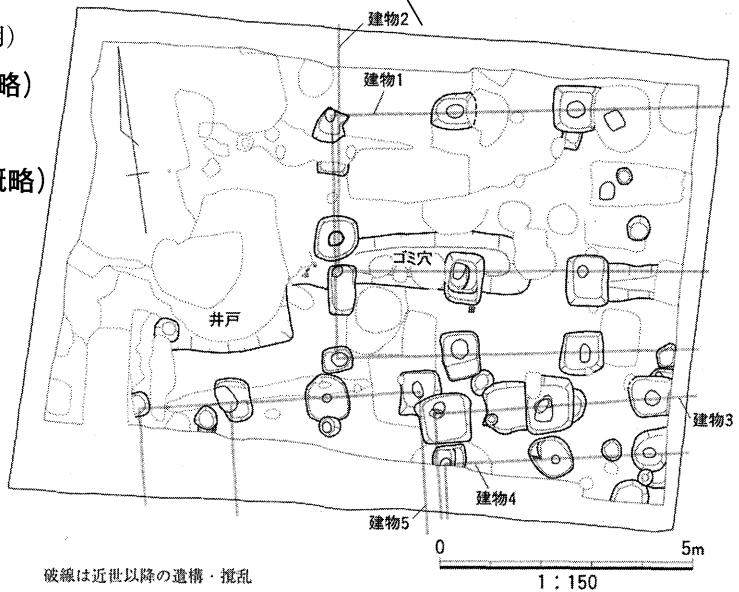


図4上 大坂実測図に見る四天王寺周辺の  
方格地割 (岩本1992より加筆引用)

図4中 上本町南遺跡の溝 (位置は概略)  
(平田2004より)

図4下 上本町南遺跡の建物(位置は概略)  
(高橋2006より)



## (2)大川南岸の方格地割について

積山説では、難波宮北方、大川南岸で検出される正方方位志向の遺構群もまた京域に含めて考える。もちろん、そのように考えることも可能であるが、この場合、なぜこの地域に正方方位の地割が施行されたのかについて、合理的な説明が必要となる。

大川が5世紀以降の掘削により成立した難波堀江にあたることは、これまでの研究が明らかにしたとおりであろう。難波津の位置をめぐるには、大阪湾に接する三津寺説と大川南岸の高麗橋説が対立しているが、考古資料の分布に基づく限り、高麗橋周辺には飛鳥・奈良時代の遺構・遺物が濃密に分布しているのに対し、三津寺周辺にそのようなものが見られないことから、高麗橋説が妥当と考えている(古市2004)。

難波堀江・難波津周辺は倭王権の西日本における物資の集散拠点であったばかりでなく、貴族や有力寺院の経営拠点が置かれ、国家権力とは相対的に自立した経営が行われていた(栄原1992)。堀江北岸には孝徳の政治顧問的役割を果たした僧旻の居した安曇寺があった可能性が高く、南岸にも逸名の古代寺院が存在したと思われる(古市2002)。『延喜式』民部上に見える「摂津国堀江寺」は、これらの寺院の後身の一つかもしれない。

また大川南岸には、外交使節を迎接する難波大郡や、使節が滞在する館が設けられるなど、孝徳朝難波宮に先立ち、6世紀代には都市的状況を呈していた。堀江南岸に設けられた方格地割とは、難波京に先行して自立的な地位を占め、また外交上も重要なこの都市域を、京に包摂すべく設けられたものと考えられないだろうか(古市2004)。現状では論証の決め手を欠くが、難波宮から一定の距離を隔てた当該地において(前期難波宮内裏前殿から、堀江南岸で7世紀代以降、9世紀代まで遺構が継続する現大阪市立中央高校〈OS90-50次調査〉まで、直線距離にして約1km)、正方方位志向の遺構が集中する状況は、こうした歴史的経緯によって説明できるのではないかと考える。

## おわりに

1990年代以降、難波宮に関する重要な考古学的発見が相次ぎ、難波宮に関する研究もそれによって飛躍的な進展を遂げている。一方、京域に関しては、いくつかの重要な発見と研究は蓄積されているものの、資料の不足という根本的な問題は、いまだ解決されていない。しかし新益京、平城京などにおける調査の進展により、京に関する研究は面目を一新しつつある。難波京研究においては、これらの新たな研究成果を受けて、既存の調査成果の見直し、文献史料の再解釈などを試みていく必要があるだろう。本稿は先学の驥尾に付してこれまでの成果を再整理したにすぎないが、今後機会を得て上記の課題に取り組みたいと考えている。

## 【参考文献】

- 岩本次郎1992「副都難波京」直木孝次郎編『古代を考える 難波』（吉川弘文館）
- 植木久2000「後期難波宮と難波京 —平城宮、長岡京との比較をもとに」『条里制・古代都市研究』16
- 大阪市教育委員会他2002『平成12年度 大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』
- 大阪府文化財センター 2008「都市計画道路大和川線建設に伴う大和川今池遺跡発掘調査 現地説明会資料 難波大道の調査」
- 小澤毅1997「古代都市『藤原京』の成立」同氏『日本古代宮都構造の研究』（青木書店、2003年）
- 岸俊男1977「難波の都城・宮室」同氏『日本古代宮都の研究』（岩波書店、1988年）
- 黒崎直2007「前期難波宮の宮域と京」『遺跡学研究』4
- 荻原永遠男1992「難波堀江と難波の市」直木孝次郎編『古代を考える 難波』吉川弘文館
- 沢村仁1970「難波京について」難波宮顕彰会他『難波宮址の研究』6
- 積山洋1997「難波京の方格地割をさぐる」『郵政考古紀要』24
- 積山洋2002「難波京の変容 —奈良末から平安初期の様相をめぐって」『条里制・古代都市研究』18
- 積山洋2004「孝徳朝の難波宮と造都構想」塚田孝編『大阪における都市の発展と構造』（山川出版社）
- 高橋工2006「古代難波の市井を掘る」『葦火』124
- 高橋工2007「細工谷遺跡周辺の古代における谷の開発について」大阪市文化財協会『細工谷遺跡発掘調査報告Ⅱ』
- 田辺征夫2005「方格地割都城と方位に関する若干の覚書」『飛鳥文化財論攷 —納谷守幸氏追悼論文集』
- 寺井誠2004「難波宮成立期における土地開発」大阪市文化財協会『難波宮址の研究』12
- 中尾芳治1976「難波宮と難波京」上田正昭編『日本古代文化の探求 都城』（社会思想社）
- 長山雅一1988「『羅城土居』と書かれた文書について」『葦火』15
- 林部均2007「飛鳥の諸宮と藤原京」吉村武彦・山路直充編『都城 古代日本のシンボリズム』（青木書店）
- 平川南2006「道祖神信仰の源流 —古代の道の祭祀と陽物形木製品から—」『国立歴史民俗博物館研究報告』133
- 平田洋司2004「奈良時代の京整備」『葦火』113
- 藤岡謙二郎1971「古代の難波京域を中心とした若干の歴史地理学的考察」織田武雄先生退官記念事業会編『織田武雄先生退官記念人文地理学論叢』（柳原書店）
- 古市晃2002「孝徳朝難波宮の史的意義」同『日本古代王権の支配論理』（塙書房、2009年）
- 古市晃2004「都市史から見た難波宮・難波京研究の展望」塚田孝編『大阪における都市の発展と構造』（山川出版社）
- 古市晃2009「飛鳥の空間構造と都市住民の成立」前掲『日本古代王権の支配論理』
- 松本啓子2007「細工谷遺跡で新たに大型建物を確認」『葦火』126
- 大和川今池調査会1980『大和川今池遺跡』Ⅲ
- 吉川真司1997「難波長柄豊碕宮の歴史的位置」大山喬平教授退官記念会編『日本国家の史的特質』古代・中世（思文閣出版）
- 吉田晶1982『古代の難波』（教育社）
- 李陽浩2005「前期・後期難波宮の中軸線と建物方位について」大阪市文化財協会『難波宮址の研究』13